

魔の聖域

楢山芙二夫



毎日新聞社

聖域

樽山芙二夫



毎日新聞社

——著者紹介——

ならやま ふ じ お
橋山 芙二夫

昭和23年6月13日岩手県生れ、本名橋山富士雄、桐朋学園大学芸術科演劇学部卒、「ニューヨークのサムライ」で第46回オール読物新人賞受賞、直木賞候補2回。

著書に、「滅びゆく日々のために」(光風社)「午前零時の星条旗」(集英社)「マンハッタンのバラード」(文芸春秋)

魔の聖域

九八〇円

昭和五十四年九月五日 印刷
昭和五十四年九月十五日 発行

著 者 橋 山 芙 二 夫

編集人 川 合 多 喜 夫

発行人 牧 内 節 男

発行所 毎 日 新 聞 社

●一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
●五三〇 大阪市北区堂島
●八〇二 北九州市小倉北区紺屋町
●四五〇 名古屋市中村区名駅

印刷 中央精版

製本 大口製本

魔の聖域・目次

第一章 5

第二章 89

第三章 133

第四章 233

イラストレーション・藤本蒼

魔の聖域

第一章

1

宇野はもはや手負いの一匹狼にしかすぎなかった。

すでに、都内全域に指名手配されていることはわかっていた。

疲れが、重い液体のように彼の身体の中に澱んでいた。

それは一仕事終えたあとの、少しずつ充足感に変わってゆくような、安らぎに似た疲労感ではなかった。

空虚な、精神的な徒労感だった。

思い切り眠りたい、と思った。

夢を見ているようだった。

しかし、自分のアパートへ帰れば、同僚の刑事が張込んでいるにちがいがなかった。

冬空の下で、宇野の帰りを張込んでいる同僚の刑事たちのことを思うと、昨日まで彼もその仲間になっていたという事実が、嘘のように思えた。

そのとき、彼は初めて袋小路に追いつめられた自分を意識したのだった。

だが、追われる身の怖ろしさというか、緊迫感はなかった。

今の彼にはもう、怖れも、悲しみも、また混乱もなかった。

なぜなら、すでに引き返すことのできない道を択んでしまった彼にあるものは、たとえ、その道が奈落の底に墜ちていることがわかっていても、ただ前へ突き進むだけであつたからだ。むろん、立ち止まることさえできない。

宇野は、冷めかけたコーヒーを一口飲むと、煙草に火をつけた。

街はずれの裏通りに面した目立たない小さな喫茶店に入つて、三十分近くが経っていた。

狭い店には、低いカウンターと、ボックスが二席あるだけだった。

入口に近いボックスに腰をおろした宇野の他に、客は誰もいなかった。

髪長い不潔な感じがするウェイターと顔色の悪いウェイトレスは、カウンターの隅で何かぼそぼそ話し合っていた。二人とも若かった。

そして、宇野が入ったときからラジオがかかっている、音楽が聞えていたが、やがて十時の時報につづいて、今日の午後赤坂でピストル乱射事件があつたというニュースが流れた。

被害者はY警察署の山本俊雄署長で、至近距離から二発撃ち込まれ、二発とも命中し、うち一発は左胸部を貫通、間もなく出血多量で死亡。その後、発射された拳銃の弾丸、及び目撃者の証言から、犯人はY署捜査一課に勤務している宇野弘刑事であることには、ほぼ間違いないと断定、現在逃走中の宇野を殺人容疑で指名手配したとアナウンサーは伝えた。

宇野はさして驚かなかつた。汚職にまみれた悪徳上司を抹殺する計画を立てたときから、すで

に身の振り方は決っていた。

ニュースが終ると、再び音楽が流れた。

「カッコいいわね」

背後で、女の眩き声が聞えた。

その言葉は唐突で、宇野の乾いた心の中に、うつろに響いた。

なぜか、嘲弄されたような気分になって、自尊心が傷ついた。その傷口から噴き出る怒りが、いつそう彼を惨めにした。

「くだらない……」

と宇野は、溜息まじりに独り言を言うと、自嘲的に唇を歪め、灰皿の中で煙草を押し潰した。テーブルの上のカップには、飲みかけのコーヒーが黒い夜のように溜まっていた。その中に視線を落すと、頬が削げて蒼ざめた表情をした青年の顔が浮かんで見えた。その顔が、下から宇野を見上げていた。

一瞬、目が合うと、なぜか宇野はどきりとした。

彼はその自分の顔に、人生を投げてしまった者だけが漂わせている孤影を見たような気がしたからだった。

それは、追うことにも追われることにも疲れた、彼の素顔であった。

だから、今のニュースを聞いた彼ら二人に、警察へ密告されることなど怖れてはいなかった。しかし、捕まる前に、彼にはどうしてもやらなければならないことがあった。

宇野は自分のとるべき道を考えた。

道は二つあったが、すでに上司を射殺したあとでは、法廷に立ってY署幹部の腐敗ぶりを告発したところで、すべてが遅すぎた。となれば、署長と特に黒い交際のあった塚田公作を恐喝する以外に、残された道はなかった。しかも、政治家である塚田は、建設会社や不動産会社の社長で、もあり、恐喝ぐらいでは潰れるような男ではなかった。貪欲で、自分の名譽しか考えることができない彼は、おそらく騒ぎが大きくなることを好まないばかりか、どんな手段を使っても、自分の汚名を揉み消そうとするはずだった。

この最後の賭けが、殉職した同僚の奥村刑事へ捧げる弔いであつた。余計なことかもしれないが、これが宇野にしてやれる奥村の女房への贈物だった。同情からではなかった。自分自身のためだった。

うまくいくかどうかは、問題ではない。今さらそんなことを考えてもはじまらなかった。問題は、もう後に引き返すことはできない、ということだ。いつの場合でも、自分が忤んで歩いて来た道であるかぎり、決して振り返ってはならないのだ。振り返れば、未練が邪魔をして、決断をにぶらせるからだつた。……だが、塚田を恐喝する前に、同僚の刑事に電話をして迷惑をかけたことだけは謝っておこう、と宇野は思いながら、考えを整理していると、不意に女が言った。

「あの……他に、ご注文はありませんか？ もしなければ、そろそろ店を閉めますので」

反射的に、宇野は腕時計に目をやった。

十時半だった。

席を立った宇野は、勘定を払うと、決心したようにその店を出た。

静かな夜だった。

宇野は唸るような風の音を聞いたと思ったが、耳をすますと、環状線を走り抜ける遠い車の音しか聞えなかった。

渓谷で、滝の音に包まれて、一瞬、真空状態になったときのように意識が薄れかけた。

宇野は公衆電話を捜した。

暗い路地に、人影は全く見えなかった。

十字路の角にさしかかると、風に吹かれる瞬間があった。

同時に、鋭い孤立感に襲われた。

おもわず、宇野はトレンチ・コートの襟を立てた。

表通りへ抜ける道の角に、電話ボックスがあった。

宇野は交換手を通さずに、刑事部屋にかかる直通電話のダイヤルを回した。

すぐ同僚の刑事が電話口に出た。

宇野はまず、署長を射殺して迷惑をかけていることを謝り、それから刑事部屋に誰がいるのか訊いた。

「おれだけだ」

と、同僚の刑事が言った。「さっきまで主任がいたが、首脳会議に出ているので部屋に残っているのは、おれの他には誰もいない」

「そうか。あとはみんなおれを捜しに出ているんだな」

「それより、どこにいるんだ、宇野。どこから電話をかけているんだ」

「それは言えない」

「おれにもか……？」

「ああ。今は立場がちがうからな。もう、おれは刑事ではないんだ」

「しかし、馬鹿なことをしたな」

「おれの考えでやったことなんだ。責任は全部おれにある。君たちに迷惑がかかる手段を採んだことは済まないと思っているが、そのかわり、自分のことは自分で処理する。みんなよろしく――」

「ちょっと待ってくれ。自分のやったことがわかっていいるなら、今からでも遅くはない、自首しろよ」

「それはできない」

「おれと一緒にいってやってもいいぞ」

「済まない。自首するつもりはないんだ」

「だが、どんなことをしても、いずれ捕まるぞ」

「そうなることはわかっていいるが、しかしそれまでは、おれはおれ自身のために逃げつつけるよ」

「本気なのか」

「本気だ」

「そうか。それじゃ一つだけ教えてくれ、なぜ署長を殺^やったんだ」

「知らないほうがいい。惨めになるだけだ。どうせ理由がわかったからといって、君にはどうすることもできないんだよ」

「それは卑怯だよ」

「そうだろうな。おれには、正義なんて性に合わないんだ」

「だがなあ、宇野。悪いことは言わない——」

「もう、そのへんでいいだろう」

と宇野は彼の言葉をさえぎって言った。「君と言い争うつもりはないんだ。とにかく、君等に余計な迷惑をかけたことを謝っておきたかったんだ。電話をしたのはそれだけだ。許してくれ、とは言わない」

「お前、変ったなあ」

「……」

宇野は静かに受話器を置いた。

その音が、電話ボックスの中に、うつろに響いた。

それは、十年間つづけてきた刑事生活が、プツリと切れた音のようだった。

電話ボックスを出ると、彼はタクシーを拾い、青山へ向かった。

午前一時。

青山墓地の近くにあるマンションの五階。

理恵の部屋。

宇野は窓際に立って、寝静まった青山の住宅地を見おろしている。

そうして彼は、理恵という女を人質に塚田を恐喝するためにここまで逃げ延びて来た経緯を、

今さらのように思い浮かべていたのだった。

そのことに気づいた宇野は、ふと我に還って、視線を玄關のほうへ戻した。

塚田公作はまだ現われない。

理恵は塚田の情婦である。

美人で通る彫りの深い顔立ちをしているわりには、どこか蛇のような冷たい印象を受けた。それでいて妙に崩れた色気を漂わせているのは、二十歳を多く出していないのに、肉体のほうが先に成熟して、無理矢理大人にさせられたきわどい均衡が、彼女の魅力になっているからかもしれない。

それは、今でこそちがうが、映画にデビューした頃の青木麻利のキャラクターそのものであった。理恵は、その下には何も付けていないことが透けて見えるほどに薄いネグリジェ姿で、応接間のソファアーにじっと坐っていた。

宇野はまだ窓際に立っている。

しかし、理恵が動こうとしないのは、宇野が握りしめているブローニング・三八〇の銃口が、彼女の顔に向けられているからだだった。

マガジンには、弾は四発残っていた。

万一の際のために安全装置ははずしてあった。

彼女の部屋に押し入ってから、すでに二時間近くが経っていた。

もうそろそろ塚田が現われてもよさそうだった。

宇野は腕時計を見た。

一時十分だった。

「寒いわ……」

不意に、理恵が呟いた。

風呂からあがったばかりのネグリジェ姿の理恵を、電話口に出して、そのままだった。

塚田は成城の家にいた。

山本署長が殺されたことはテレビのニュースを見て知っていた。

宇野は理恵と引きかえに一億円を要求した。

大臣の椅子を狙っている塚田にとって、今、理恵を殺されることは、致命的なスキャンダルになるはずだった。

いくら一億円を出す価値のない愛人でも、汚名と引きかえに失う大臣の椅子は大きすぎた。

明日まで待ってくれ、と塚田は言った。

銀行があかなければ金を作るのは無理だということだった。

だが、待ってなどいられなかった。

今夜中に集められる金はせいぜい五千万円ぐらいだ、と言う。

宇野は承知した。

そのかわり、午前一時までに一人で持って来る条件を吞ませた。

その約束の時間は、過ぎている。

「ねえ、煙草ぐらい吸ってもいいでしょう」

また、理恵が言った。

宇野は、四発残った弾の使い道を考えた。

「わたしを愛してなくても、あの人は必ず来るわよ。そういう人よ、あの人は……」

理恵はそう言うのと、勝手に煙草に火をつけた。

たいていの人間は拳銃を見ると緊張するものだが、彼女にしてみれば、銃口が向けられていようがいまいが、全く自分以外には関心がないといった感じで、ソファーに坐って煙草を吸っている。

「いつまでそこに立っているつもり……？ 疲れたでしょう、ここに坐ってお酒でも飲みながら、わたしの相手をしたくない、……ねえ、聞いているの？ 風邪をひいたら、あなたのせいよ」

そう言って、理恵が立ちあがったとき、マンションの前に一台の乗用車が停まった。

「坐っている！」

反射的に、宇野は押し殺した声で言った。

やがて、鞆を持った男が、その車から降りた。

一人だけだった。

しばらく男は車の前に佇んでいた。

夜の闇に包まれた周囲には、男の他に人のいる気配はなかった。

歩き出す一瞬、その男は顔をあげて、マンションの五階のあたりを見上げた。

塚田公作だった。

宇野はちょっと顔をそらした。

視線が合ったような気がしたのだ。